

---

# 未来人の異世界漫遊記 in I S

ポンポコ狸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

未来人の異世界漫遊記 in IS

### 【Nコード】

N7300Y

### 【作者名】

ポンポコ狸

### 【あらすじ】

極普通に輪廻転生し、未来で誕生した主人公が前世の記憶を思い出した事から始まります。

極普通に勉強して就職した主人公が、事故？によって異世界に飛ばされます。

主人公的には、極普通の知識・技術・物品・行動が織り成す八チヤメチヤ物語です。

## プロローグ（前書き）

テンプレチートオリ主でなく、未来のちょっと秀才な一般人が介入するお話です。

## プロローグ

宇宙に浮かぶ星を眼下に納め、一人の青年が呆然としていた。

「……………どうしよう?」

青年の口から出たのは、そんな言葉だった。

青年の名前は、キリサキ マコト霧崎誠。

おとめ座超銀河団連邦宇宙軍・おとめ座銀河団天の川銀河方面軍  
司令長官である。

そして……………。

「流石に2度目の人生で、この変化球的展開は一寸……………」

転生者でもあった。

「宇宙軍に入ったのは失敗だったな・・・」

4

誠は艦橋のシートに体重をかけながら回想にふける。

誠の前世は、20XX年に交通事故で死んだ事で終りを迎えている。

そして、次に誠の意識が覚醒したのは約2万年後、G C（銀河歴）16234年の事だ。

誠も初めは転生という事態に戸惑っていたが、周囲と己の状況を把握すると段々と落ち着きを取り戻した。

幾ばくかの月日が経ち、体が自由に動く様になると好奇心に任せて色々と情報を調べ始めた。

新聞や週刊誌、Gnet（銀河ネット）等を駆使して調べ上げた。

そして判明する数々の事実、それらは誠にとって実に興味深く又、魅力的であった。

それからの彼の行動は素早く、精力的だった。

様々な知識、技術、得られる全てに対して手を伸ばし修得していた。

その結果、誠は若くして数々の博士号や特許を習得し将来を有望視された。

一流銀河間企業から連邦中央政府まで様々な所から好条件な勧誘の話が多数寄せられた。

しかし、誠はそれらの誘いを全てを蹴って連邦宇宙軍に志願した。

これには勧誘していた関係各所に動揺が走る。

理由は連邦宇宙軍にある。

連邦宇宙軍、それは1万年程前の連邦結成期に共に組織された軍事組織だ。

当時、連邦結成に反対する勢力・組織が多数存在し、各銀河団の治安が悪化した。

それに対し、連邦政府は武力制圧を選択。

これに伴う戦闘は2千年程続き、後に統合戦争と呼ばれる。

戦後、連邦宇宙軍はその規模を大幅に縮小され、連邦管理宙域を巡回する事が主任務とされた。

また広大な宇宙が任地なので、一度任務に就くと数年から数十年は母星に戻って来れない。

それに伴い軍は不人気職となり、慢性的な人員の欠乏、予算の大幅削減等により嘗ての栄華は過去の物となった。

そして平穏な時代が長期間続き、今では連邦宇宙軍の別名は宇宙の灯台守と呼ばれるようになった。

その灯台守に、将来有望と期待される誠は自ら志願したのだ。

因みに、誠が宇宙軍を志願した理由は『巨大な宇宙戦艦にロマンを感じたから』。

しかし、この事で一番慌てたのは当の宇宙軍だった。

あらゆる所から色々な意味で目を付けられ困り果て、宇宙軍は入隊した誠に即席の士官教育を施した上で、適当な理由を捏ち上げ昇進させた後、宇宙艦隊を与えホトボリが冷めるまで表に出て来るなと、辺境宙域警備任務を与えた。

そして誕生したのが、艦隊総数1000隻・艦隊人員1名の、おとめ座超銀河団連邦宇宙軍・おとめ座銀河団天の川銀河方面軍司令

長官・霧崎誠准将である。

赴任当初は、誠も自分に与えられた宇宙艦隊を大喜びで弄り回していた。

任地も辺境とは言え、人型的生命体の発祥地の一つである地球が属する銀河なので、冷遇はされていなかった。

軍創設以来研究蓄積されてきた、あらゆる艦隊運用パターンや攻撃フォーメーション等を試していた。

他にも、嘗ての故郷地球が存在する銀河を隈なく探索したりもしていた。



しかし流石に数十年もすると流石に飽きてきたのか、軍本部に演習と言う名目で許可を取り無人艦隊どうしによる対戦ゲームを始めようとするに到った。

それから誠は軍本部が年度末の予算使い切りの為に建造した、全自動超大型工廠ドック艦を送って貰った。

この艦は、必要な資源さえあればデータベースに登録されているあらゆる物品を、極短時間で製造する事が可能な全長560?の万能ドック艦である。

誠は周辺宙域のデブリや屑星を資源として、膨大な数の無人艦隊を建造し始めた。

そして、幾許かの月日が経つ頃には夥しい数の戦艦・空母・巡洋艦・駆逐艦・潜宙艦・航宙機が生産された。

「これより、赤軍对白軍の模擬戦を開始する。全艦、抜錨！」

そして始まったのは、建造された無人艦隊を2艦隊に分けた大規模演習である。

艦隊の長距離砲撃戦から始まり、潜宙艦による奇襲攪乱攻撃、航宙機による接近戦。

バトルフィールドに指定された無人宙域全体を縦横無尽に使った大規模戦闘である。

尚、この演習は艦隊が再建される度に、度々起こる事に成る。

そんなこんなで数十回目の演習終了時に、それは起こった。

その回は誠がノリと勢いで生産した兵器郡を在庫一掃の心算で大量使用したのだ。

重力兵器・空間兵器・相転移兵器・反物質兵器等など。

大規模破壊兵器を無制限使用した為、誠が行った演習は大規模な損害を出した。

バトルフィールド内の複数の恒星系の消滅・無人艦隊全滅・ドック艦小破・総旗艦中破等などである。

流石にこの惨状には誠も反省した。

死傷者こそ出なかった物の、周辺の宙域は重力異常・空間湾曲等極めて不安定な状態に成っていた。

「拙いな。幾ら辺境星域とは言え、此処までの大事に成ると隠蔽工作の時間が足りないな。このままだと誤魔化し切れないなかも」

誠の保有する技術であれば、恒星系の再構築・重力異常解消・空間以上の解消等も特に問題なく行う事が出来る。

流石に恒星系大規模再構築ともなると時間が掛かるが。

特に今回は相転移兵器や反物質兵器を使用した為、材料となるデブリや屑星も綺麗サッパリ消滅してしまい、材料を他の宙域から運び込むと言う所から始める必要がある。

しかし、今回に限って言えば、その心配は無用な物になった

「………穴？」

先程まで演習を行っていた宙域に、突如空間の穴が発生。

誠は即座に艦の観測機器を総動員して、穴の観測及び分析を行った。

結果、発生した穴はブラックホールや超空間突入ゲートと違い、エネルギー放射等を行っていないが、徐々にその規模を拡大していった。

穴の規模がドック艦の全長に等しく成る頃、穴に変化が起きた。

「……おいおいおい。何か、こっちに向かって来てる様に見えるんだが？ 気のせいだ様な、気のせいだ様な！？」

しかし誠の祈りは通じず、穴は無常にもメインスラスターが破損し行動不能状態のドック艦に向かって高速で接近し……飲み込んだ。



## プロローグ（後書き）

感想お待ちしております。

## 第一話 現状認識 1 (前書き)

地球行きはもう少し後になります。

一話、2000字程度でいこうと思います。

## 第一話 現状認識 1

「取り合えず・・・此処は何処だ？」

誠は艦が穴に飲み込まれ吐き出された後、即座に現在地の座標を  
確認した。

結果は位置座標に変化無し。

おとめ座銀河団・天の川銀河である事が判明した。

しかし・・・。

「軍本部とも連絡は取れないし、民間通信網にもGnetにも接  
続不可能・・・」

まず通常では在り得ない状況である。

どれか一つが繋がらないと言う事態は有っても、全てが繋がらな



いと言う事態はまず存在しない。

特にGnetはインターネットの発展版である。

おとめ座超銀河団が丸々消滅する様な事態でもない限り、必ず何処かのサーバーに超光速通信で常時接続が可能なのである。

誠は即座に確認作業に移った。

「ミナカ、広域索敵開始。範囲は取り合えず、天の川銀河全域。索敵対象、生命反応・電波・磁波・光波・重力波・量子波。ライブラリーから知的生命体が居住している宙域を検索参照、重点的に索敵」

『了解、了解。広域索敵終了予定まで3000s。それと、ドック艦及び総旗艦の修理完了予定は36000s程だよ』

誠の命令に応えたのは、艦隊を統制する三体の人工知能の1つ、あめのみなかぬしのかみ天之御中主神通称ミナカ。

主に、総旗艦とドック艦の制御を担当している。

「タカミ、先程の現象分析開始。結果が出次第報告を」

「了解した。一次分析終了まで3000sの予定だ」

次に応えるたのは、高御産巢日神 たかみむすひのかみ 通称タカミ。

主に、艦隊の技術部門を担当している。

「ムスビ、ドック内で近衛艦隊を第二種戦闘配置でスタンバイさせておけ。ミナカの報告しだいで即時に出撃、第一種戦闘配置に移行する」

《了解です！ 第二種戦闘配置完了まで後100s。 抜錨後、60sで第一種戦闘配置完了です！》

最後に応えたのは、神産巢日神 かみむすびのかみ 通称ムスビ。

主に、無人近衛艦隊の統制と戦闘を担当している。

「後は、ミナカとタカミの報告を待つてからだな」

誠は粗方の指示を出した後、一息ついていた。

「・・・は？ 天の川銀河で全帯域の超光速通信（Faster  
- Than - Light Communication：FTL通  
信）波を一切傍受できない？」

『そうなんだよ。 それどころか、この付近に有る筈の非常用の  
救命無人ステーションとも連絡不能なんだよ。 まるで元々そんな  
物存在しないかの様に』

誠は眉を顰めながら、ミナトの報告を聞く。

現在の通信方式は、ほぼ全てがタイムラグの発生しないFTL通  
信が採用されている。

その通信波が一切傍受出来ない。

「あ、此方の報告も良いか？ おそらく、FTL通信が？がない疑問に答えが出る筈だ」

「何か分かったのか、タカミ？」

「ああ。 まず、この映像を見てくれ」

ミナカの報告にタカミが割り込みながら、自分の報告を始めた。

そして、タカミはとある恒星系の映像を表示した。

「この映像が如何したんだ？ 特に変わった様子は無いが？」

「そう、 “ 変わった ” 様子が無いんだ」

「？ それの何処がいけないんだ？」

誠はタカミが表示した映像を見て特に疑問点を見出せなかったが、タカミは疑問点の無さを指摘した。

「……この恒星系は、記録上では1万年程前に恒星爆発で消滅

している」

「……は？　じゃあ何か？　あの恒星系は誰かが再生させたのか？」

「その可能性は少ないな。　簡易計測だがあの恒星系の恒星は、後数千年程度で寿命だ」

「……おい。　さっき言っていたFTL通信が？　がらなかった原因って……まさか」

「あの穴がタイムホールで、時間移動をしたのだろうな。　それならこれらの事態にも、ある程度の説明は付く」

絶句。

流石の誠もこの事態は想定していなかった。

と、言うよりも。

まさか未来に輪廻転生した自分が、過去に時間移動するとは思っても見ない事態であった。

「おいおい、出戻りは無いだろに」

時間移動自体は、既に連邦科学アカデミーで限定的ながら実用化されている。

余程特殊な事態でもない限り、使用許可はまず下りないと言う代物だ。

「ムスビ、偵察分艦隊を出撃させる。隠密行動でライブラリーに登録されている、天の川銀河の知的生命体が存在する星を精密探查させる。隠密行動を最優先、見つけりそうなら即座に撤退」

《了解しました。偵察分艦隊、全艦抜錨開始。ライブラリーより検索、探查対象数200。内、優先探查目標数15。優先順位の設定を行いますか？》

「太陽系第三惑星を最優先探查目標に設定。以降、順次近隣優先目標から探查を続行」

《了解しました。太陽系第三惑星を最優先目標に設定。偵察分艦隊抜錨完了。第一探查目標探查終了予定3600s。タカミさん、データ解析をお任せします》

「ああ、データ解析は任せな」

《有難う御座います、タカミさん。 偵察分艦隊準備完了。 何時でも出れます》

ムスビの報告通り、偵察分艦隊が全艦ドック艦から抜錨し、誠からの進軍命令を待つ。

「偵察分艦隊全艦発進！」

発進命令を得て、偵察分艦隊は太陽系に向かって進発した。

一隻でも星を瞬時に消滅させるだけの力を持っている60隻余の小艦隊が。

(・・・せめて初期文明段階で良いから、まともな文明があると良いな)





## 第一話 現状認識 1（後書き）

作中内の文明レベルは、以下の区分訳で行きます。

初期文明段階：大気圏離脱技術を持っていて、惑星外に進出している。

中期文明段階：惑星間航行技術を持っていて、恒星系内に進出している。

後期文明段階：恒星間航行技術を持っていて、他恒星系へ進出している。

感想お待ちしております。

## 第二話 現状認識2

眼前のディスプレイに表示される太陽系第三惑星の解析データの前に、誠は呆然としていた。

「・・・これ本当？ 何かの間違いって事ない？ 別の星を観測したとかさ？」

「特に間違っでは居ないぞ？ リアルタイム映像を表示するか？」

「ああ、頼む」

そして、新たな映像が表示される。

海上の一点を囲む様に、複数の艦船・大気圏内用戦闘機が群がっている映像が。

映像が動き出すのと同時に、それら複数の艦艇は一点に向かい一

斉にミサイルを発射し始めた。

上から見るその光景はまるで、打ち上げ花火が逆再生している様に見える。

しかし、その花火達は中心点に存在する人型に到達する事は出来なかった。

「あの光線は、レーザーか？」

「いや？ 観測データを見る限り、低出力な荷電粒子ビームだな」

タカミと誠は、ミサイル群を迎撃した方法を互いに検討していた。

「低出力ビームの割には、随分簡単に落ちるな？ 耐ビームコーティング程度も施されて無いのか？」

「そう見たいだな。その上ただ目標に直進するだけの貧弱な代物らしい」

因みに、誠達が使用しているミサイルと呼ばれる物は、重力慣性制御機構を搭載し周囲の空間や慣性系を捻じ曲げながら複雑怪奇な

機動を亜光速で飛翔する物騒な代物である。

「あゝ、機動性能が違いすぎるな。　　どんどん、落とされてるぞ」

「あの人型は、極初步的ながら慣性制御機構が搭載されてるみたいだな。　　単なる空力制御の戦闘機では、相手に成らん」

ミサイル攻撃が効かないと見ると、戦闘機群が人型に向かって攻撃を始める。

しかし人型は戦闘機群の攻撃を、かわし・弾き・受け止めながら戦闘機を次々に落としていく。

「おつ。　　戦艦の砲弾を食らっても、弾き飛ばされるだけで済ませやがった」

「空間湾曲発生、重力フィールドの発生を確認。　　低出力ながら、防御フィールドとして使用している様だな。　　観測データを見た限り、彼らの現存兵器である人型を撃破するのは不可能だろう」

包囲する艦船による無数の機銃弾幕の合間に発射された、戦艦部隊の主砲が斉射され、その内の一発が人型に命中する。

しかし、人型は弾き飛ばされこそすれ、目立った損傷を一切受け

る事は無かった。

「あゝあ、艦船も沈められ始めたな。　お、エンジンを殺られたな」

「現在、艦隊戦力の80%程が大破もしくは中破と言う所だな。文字通りの全滅も時間の問題だな」

人型を包囲する艦船の大半は、黒煙を上げていた。

索敵機器を破壊され艦橋から煙を吐く巡洋艦やフリゲート艦等の小・中型艦、推進機関を破壊され炎と黒煙を挙げながら傾く戦艦や空母等の大型艦。

無傷と呼べるのは数隻の駆逐艦のみと言う有様。

「・・・ん？　見失ったのか？」

「アクティブステルス波及び光学迷彩を検出。　撤退するみたいだな。　極初步的且つ限定的なステルスだが、あの艦隊の技術レベルなら有効だろう」

残存する艦隊と戦闘機の動きに変化が生じた。

誠の見るディスプレイには人型の姿がハッキリと映っていたが、

艦隊の動きは目標を見失って右往左往していた。

その姿を尻目に人型に撤退していった。

「映像は、もう良いぞ。 調査報告ご苦労さま。 偵察艦を完全  
隠密モードで一隻残して、他の偵察艦隊は星域探査の続行を」

「了解した」

《了解しました。 順次探査目標に向かいます》

人型が撤退した頃、誠は映像の接続を切る様に指示を出した。

調査映像のお陰で誠は、自分が“何処に居る”のかが、凡その推察が付いた為である。

ムスビに調査の続行を指示しているが、誠は半ば無駄だろうと感じていた。

「少し考え事がしたいから、自室に戻る」

誠は艦橋を出て、自室に向かう。

艦橋からそう離れていない位置にある自室に着くと、誠はベッドに倒れこんだ。

そして暫くすると、身悶えながらベッドの上を転げまわり始めた。

数分ほど奇行が続いた後に、誠は動きを止め小さな呻き声を上げ始めた。

「（・・・おいおい、あれってもしかして、あれか？）」

枕に顔を押し付けながら頭の中で、先程の映像を反芻する。

ある意味で見覚えのある物体。

又、ある意味で見覚えの無い物体。

「・・・勘弁してくれよ」

誠はまるで、この世が終わったかのようなドンヨリとした空気を纏い出した。

「（・・・未来に転生したからには、こう言う事態も無いって事は無いだろうけど）」

誠は自分に言い聞かせる様に呟く。

「（昔ネットで見た、テンプレSS展開ってやつか？ だとしたら、何もこんな変化球的な展開にしくなくても良いんじゃないか？ 昔風で言えば、定年退職している様な年齢の人間なんか引つ張り出さなくても、もっとヤル気のある若者に遣らせて上げようよ？ きっと、自分から立候補する様な子が沢山居るからさ。 極普通にサラリーマン軍人でいさせてくれよ）」

段々と諦めが付いて来たのか、誠が纏っていたドンヨリとした空気が薄まり始めた。



「（しかし、今更こんな所に放り込まれてもな・・・）IS・・・  
・インフィニット・ストラトスの世界か」

**第二話 現状認識2（後書き）**

感想お待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7300y/>

---

未来人の異世界漫遊記 in IS

2011年11月27日06時04分発行